『生涯学習・キャリア教育研究』第13号（2017年） 9-21頁

青年団講習所の実像
―その開設と展開過程を中心に―

上原 直人*

はじめに

JR中央線の東小金井駅から住宅街を歩いて約20分で浴恩館公園にたどりつく。そこはかつて、大日本連合青年団の施設である浴恩館（日本青年館分館）があった場所であり、公園内には随所にその面影が残されている。浴恩館は、本館、寮（青年宿舎）、空林荘（講師宿舎）、武道場、農場、運動場からなっていたが、本館と寮の一部が、現在、東京都小金井市文化財センター（資料館）となっており、館内の写真や資料から当時の様子を窺い知ることができる。

この浴恩館で中堅青年の指導者養成を目的として、1931（昭和6）年から1937（昭和12）年にわたって、全19回開設されたのが青年団講習所（当初の2回は青年団指導者養成所という名称で開設）である。そこで展開された実践は、青年団指導者として知られる田澤義鋪（1885-1944）や下村湖人（1884-1955）の教育理念が反映された自由主義的なものであったとして注目されてきた。その全体像については、歴史学者の君島和彦によってある程度把握されているが、[1] 資料的制約もあり細部までは明らかにされてこなかった。

本論文の目的は、日本青年館に保存されていた青年団講習所に関する記録（第一次資料）をもとに、その実像にせまっていくことである。戦後日本の社会教育の中核として位置づけられた公民館が、戦前の青年団指導者たちによる「村づくりの発想」に基づいて構想されたように、[2] 田澤や下村は戦後改革期における社会教育の形成にも影響を与えた人物として注目されてきた。しかし、これまでの社会教育史研究において、田澤と下村の教育思想に関してはそれなりに考察がなされてきたものの、[3] 彼らが関わった実践（田澤においては青年団教育以外に、政治教育、労働者教育と広範にわたる）の詳細な考察は行われてこなかった。したがって、本論文において、彼らが中核的に関わった青年団講習所という青年教育の実践の細部にせまっていくことは、今後、戦後社会教育への田澤と下村の影響について、掘り下げた考察を展開していく上でも重要な過程として位置づけられる。

以下、本論文の構成であるが、1では、浴恩館開館から青年団講習所の開設と展開における田澤、下村の関わりを述べるとともに、本論文において着目する一次資料の説明、及び本論文における分析の視点の提示を行う。2と3では、下村が講習所長に就任した1934（昭和8）年4月を一つの区切りとして、それ以前（第1回から第5回）と以後（第6回から第19回）における講習所の展開過程とその特徴を捉える。4では、講習所の開設と同時に、青年団の外部リーダーの養成として設けられた社会教育研究生の養成事業についてその詳細にせまる。そして5では今後の課題を提示する。

1．本論文における分析の視点

1－1．浴恩館と青年団講習所
―田澤義鋪による創設と下村湖人の参画―

青年団運動の全国的な組織化によって、1924（大正13）年に大日本連合青年団が組織され、1925（大正14）年には青年修養の拠点として日本青年館（信濃町）が設立された。その中枢にいた田澤は、かねてから、各地で青年団に対して行われている講習会が、団員や幹部（団長や副団長）に対する短期のものが中心であることに物足りなさを感じており、将来、各地方で指導者となる中堅青年に対して、真に基礎的な教養を施すような中長期の講習会を、信濃町の本館とは別に粛然と襟を正せる雰囲気の講習所で開きたいと考えていたが、大日本連合青年団の財政難もあって、新たな施設を設けて事業を実施することは困難であった。

しかし、京都御所での御大礼に使用された建物が宮内省から下賜されることになり、それを日本勧業銀行から購入した小金井の土地に移築し、1930（昭和5）年1月に日本青年館分館として浴恩館が開館し、さらに事業実施のための資金として、安田修徳会からの寄附もあって、中長期の講習会を開くという田澤の宿願は、1931（昭和6）年2月から3月にかけて、主に農村青年を対象とした第1回青年団指導者養成所が約

＊名古屋工業大学大学院工学研究科准教授

7週間の日程で開設されたことによって実現したのであった。[4] その後、1930（昭和5）年12月に、田澤の寄附により講師宿舎として「空林荘」が建築され、翌年には宿泊棟「西寮」（5月）及び体育館の建築と農場の設置（12月）もなされ、中長期の講習会を行っていく上での環境が整えられていった。[5]

1931（昭和6）年5月から6月にかけて、主に都市青年を対象とした第2回が開設された後、青年団指導者養成所（以下、養成所）は第3回からは青年団講習所（以下、講習所）と名称を変更している。下村が講習所に関わるようになったのは、1933（昭和8）年2月から3月に開設された第5回からである。東京帝国大学卒業後に中学や高等学校で教師をしていた下村は、1931（昭和6）年9月に台湾の高等学校長を辞職後、日本に帰国してまもなく、同郷（佐賀）で、旧制第五高等学校（熊本）の1年先輩でもある田澤からの要請もあって、大日本連合青年団嘱託となっていた。[6] 1933（昭和8）年4月には専任の講習所長に就任したことによって、それまでは多忙な田澤にかわって、何人かの大日本連合青年団職員によって代わる代わる支えられてきた養成所（講習所）は、以後、下村が中枢となり最終の第19回まで展開されていくこととなったのである。

1－2．資料と分析の視点

本論文において検討対象とする主な一次資料は、日本青年館に所蔵されていた全19回の記録を回ごとに束ねた『青年団指導者養成所（青年団講習所）実施概要』（以下、『実施概要』）と、講習所修了青年を対象として結成された同窓組織である浴恩会から計4回発行された『浴恩会報』（昭和8年、9年、10年、11年）である。特に、『実施概要』には、回ごとに、講習生の募集要綱（募集要項）、大日本連合青年団から各県青年団への通達、各県からの推薦状、受講希望者の履歴書と作文、講習生名簿（出身県、年齢、青年団との関係、職業、学歴※学歴に関しては第1回と第9回のみ）、当番要項と班名簿、日程時間割、講師と講義題目（一部レジュメも存在）、研究会の記録、運動会の記録、視察見学旅行記録、班報（時報、週報）等が束ねられており、講習所の実像にせまっていく上でも重要な資料といえる。なお、日本青年館から発行されていた雑誌『青年』においても、随所に講習所に関する記事が掲載されており、『実施概要』を補完する資料として位置づけられる。一方で、『浴恩会報』の内容は、田澤や下村らのメッセージ、修了生や社会教育研究生の回顧や近況報告、修了生名簿からなっており、修了後の青年たちや研究生の動向、講習所と青年たちとのつながりを把握していく上で重要な資料といえる。

これら一次資料に加えて、浴恩館と講習所の様子については、浴恩館を継承した施設である小金井市文化財センターで開館十周年を記念して開催された企画展「浴恩館と青年団―大いなる道を求めて―」（2003年11月3日～2004年2月15日）にあわせて発行された冊子『青年団と浴恩館―大いなる道を求めて―』（小金井市文化財センター、2003年11月）において、浴恩館と講習所の略年表、写真資料も用いて紹介されているほか、下村湖人『次郎物語 第五部』（1954年）でも「友愛塾」という名前で実際に近い形で紹介されており、これらは二次資料として参照する。

本論文において、主要資料として用いる『実施概要』と『浴恩会報』であるが、その全てが確認できているわけではない点はあらかじめ断っておく必要がある。『実施概要』に関しては、全ての回の記録が確認できるものの、保存状況もまちまちで、講習生の募集要綱（要項）しかない回も複数あり、また、全体を通じて手書きの記録も多く判読不能な箇所もそれなりにある。また、『浴恩会報』に関しては、第1号の所在が現段階では確認できていない。こうした制約がありつつも、各回の『実施概要』を丹念に分析していくことで、これまで明らかにされてこなかった、回ごとに一定の変化が加えられながら展開されてきたという講習所の実像にせまっていけるものと考えている。

そして、本論文では分析に際して、次の三つの視点に着目する。第一が、講習所の運営や体制の特徴を時系列的な変化も含めて捉えることである。青年団指導者養成所から青年団講習所への改称、農村青年を対象とした回と都市青年を対象とした回があったこと、下村の専任所長としての就任など大きな流れは明らかになっているが、さらに踏み込んで、参加する青年たちの属性（地域、職業、年齢）の特徴と回による相違、大日本連合青年団職員の関わり、下村の参画によってもたらされた具体的な変化、講習所の閉鎖直前の様子、同窓会組織である浴恩会の活動などについては十分に明らかにされてこなかった。

第二が、講習所における生活と教育の実像にせまることである。講習生である青年たちが班活動をベースとした共同生活を行い、講義、研究会等を通じて、青年団指導者として必要な素養を身につけていったという大まかな特徴は明らかになっているが、さらに踏み込んで、班構成や班活動のあり方と回による相違、農

村の回と都市の回とでの相違、青年たちからみた講習所生活の意味などという視点からは十分に深められてこなかった。

そして第三が、講習所の開設とともに設けられた社会教育研究生について、その詳細にせまることである。日本青年館では、講習所が展開された昭和7年度から12年度において、毎年大卒を4名程度採用し、彼らは大日本連合青年団職員の指導のもとで、講習所にも関わりながら1年間の研修を経て、各府県に社会教育職員として赴任していった。これまでその全貌はあまり知られてこなかったが、本論文において、一次資料もふまえながら、研究生の講習所との関わりや果たした役割、その後の足跡などについて可能な限り明らかにする。

なお、第一の視点と第二の視点に関しては、両方とも時系列的な変化や回による変化を含んでいる点では、それぞれ別個に論じるよりは、二つの視点をまとめる形で論じた方が分かりやすいので、明らかに体制の変化がみてとれる下村の所長就任を一つの目安として、その前後で2と3に分けて論じる。社会教育研究生そのものに焦点化した第三の視点に関しては、4で別個に論じる。また、田澤や下村の教育思想が講習所の理念にどう反映されていたのかという視点での分析はすでにある程度行っており、[7] 本論文では、あくまで資料にそくして、講習所の実像にせまるというところに力点をおくため、田澤や下村の教育思想そのものは直接的な分析対象とはしない。

2．青年団指導者養成所の開設と青年団講習所への改称

2－1．青年団指導者養成所の開設

先述のように講習施設の開設は田澤にとって永年の祈願であったが、それは田澤がそれまでの講習会に限界を感じていたからでもあった。東京帝国大学卒業後の1910（明治43）年に、内務官僚として25歳の若さで静岡県安倍郡長に赴任した田澤は、日本の政治をよくしたいという一念から農村青年に対する教育・自己修練の場の必要性を感じ、自転車を乗り回して農山村に出かけてランプの下で夜学をはじめ、憲法をはじめ政治を日常生活に結びつけて青年たちに分かりやすく説き続けた。そうした中で、1914（大正3）年3月に、静岡市の蓮永寺に25名の青年を集めて1週間の宿泊講習会を実施した。[8] これは日本で最初の長期の宿泊講習会とされるが、田澤にとっては短い期間で、また宿泊講習を行う上での設備も不十分であったため、研修の効果もどれほどあるか分からないものであった。[9]

郡長時代からしたためてきた、専用の施設を設けてそこで長期間にわたる講習を実施したいという思いが、その後、内務省辞任後、協調会理事や東京市助役を経て、大日本連合青年団と関わるようになってから、青年団指導者養成所の開設へと田澤をつき動かしていったといえる。

第1回養成所については、その後の回の基盤ともなっているので、『実施概要』や雑誌『青年』をもとにやや詳しくみていきたい。受講生募集のために作成された「養成所要綱」の冒頭で、養成所設置の趣旨とその精神について記述されている。趣旨については、「我が青年団施設の実際を見るに、漸くその形式を整へ、内容の充実に向ってその歩みを進めつつありと雖も、未だ青年団指導の任に当るべき人材の養成に欠くる所あ」って、「青年団指導者養成所を設置して、青年団指導の第一線に立って、真剣に活動すべき人材の養成を期せんとする」とこれまで不十分であった青年団指導を担う人材養成を本格的に行う旨が述べられている。また精神については、「浴恩館を道場」とした「共同生活の精神を体せしめんとするもので」あり、「単なる智識の伝達に終る所謂学校式雰囲気のうちに教養することを排し」て、「講師と講習員との人格的接触を重んじ」つつ、「先進の産業地、教育地を訪ね、地方先覚の士に問ひ」、「或は相互に研究し調査して、その協力の成果を得しうる」など、「曾ての塾生活の雰囲気に於て、十分修養せしむる」ものであるとして、自律的な共同生活に基づいて、講習員による、また講習員同士の主体的な学びを重視していく旨が述べられている。[10]

こうして、1931（昭和6）年2月3日から50日間にわたって、初めての養成所が開催されたが、その後の回における講習日数は全て50日より短いものであり（農村青年を対象とした回は39日から47日、都市青年を対象とした回は13日から29日）、可能な限り長期の日程で講習を開催したいという、田澤の養成所にかけた強い想いを窺い知ることができる。

入所資格は、「年齢満20歳以上30歳未満の男子、中等学校卒業程度の学力を有する者、将来青年団指導の任に当らんとする者」であり、定員は約50名（各加盟団1名）とされ、各府県から推薦を受けた青年が参加した。浴恩館までの往復の旅費や日常の諸雑費、視察見学に関わる諸経費は各自の負担であったが、講習期間中の宿舎費と食費は、大日本連合青年団が負担した。[11] 実際に参加した青年の属性や人数は、氏名、出身府県、職業、学歴（※学歴の情報に関しては第1回

と第９回のみ）が記載された「所生名簿」から分かる。それによれば、全国各地から万遍なく参加が見られ（樺太からの参加もある）、参加者数は 42 名（最年長は 31 歳、最年少は 21 歳）、職業の内訳は、農業 25 名、教員 10 名、商業４名、官公吏２名、漁業１名となっており、学歴は中学と農学校が多くを占めていた。[12)]

二次資料では、第１回は「農村の部」として農村青年を主たる対象としていたことになっているが、一次資料である『実施概要』においては、募集要綱にも特にそのことは記載されていない。しかし、農閑期に長期にわたって開催されている点、実際に農業に従事する青年が多く参加している点、後述するように、講義題目に〈農村研究〉が位置づけられていた点をふまえれば、第１回は、実質的に農村青年を対象としていたことが分かる。なお、農村青年を対象としていたことから、農業が盛んな地方の県からの参加が多かったように思われるかも知れないが、東京、神奈川、京都といった大都市近郊からの参加もみられ、職業として農業に従事している青年を対象としていたことが分かる。

42 名の講習生は、出身地、年齢、職業等異なる者同士から構成された８名から９名からなる５つの班に分けられ、「各室ニ室長、炊事委員、衛生委員、図書委員、購買部委員、ヲ設ケ指導主任者ノ下ニ自治的共同生活ノ円満ヲ期スルコト」とあるように、班員がそれぞれの役割を果たしながら班活動を中心とした自治的な共同生活を送ることが求められた。[13)]

講習所の生活は、『実施概要』に添付されている「日程表」によれば、日本青年館本館に集合した青年たちは、浴恩館へ移動して開所式に参加して講習所に入所してから、規則正しい生活を送った。以下の表１に示すように、多くの日は、早朝の掃除に始まって、体操や田澤による訓話、午前の講義、昼食後は、午後の講義のほか、屋外での活動や研究会、夜は懇談会や座談会などが行われた。ただし、水曜日と土曜日の午後は、個人の整理時間（洗濯・手紙・自由読書・筆記整理・感想文作成）にあてられ、日曜日は午後９時まで外出可能であった。視察見学も数回行われたが、貴族院傍聴のほか、小金井からも近い東村山村（青年団・女子青年団・青年訓練所・公民学校）、多摩少年院、三鷹村の天文台への訪問、１泊２日での茨城県の友部国民高等学校への視察、閉所後の修了旅行として、愛知県碧海郡への農業経営状況視察（町農会、鶏卵組合、農場、試験場、食品会社等）が行われた。[14)]

また、大日本連合青年団関係者、文部官僚、帝国大学教員、少年団関係者などによって、全部で 22 の講義が行われたが、それらは〈青年団と社会教育〉7 講義、〈農村研究〉5 講義、〈思想問題〉5 講義、〈政治経済〉5 講義からなっており、田澤のほか、山崎延吉、小野武夫、柳田國男、蝋山政道、前田多門ら、田澤とも親交があり、戦前において自由主義的知識人にくくられる人物が多かったといえる。その他に安積得也や加藤完治など座談会講師も複数招いている。[15)]

その他には、講習期間中に、班の持ち回りで「時報」（回によっては、「班報」や「週報」という名称）が何度か発行され、講習生たちは、思い思いに自由に、養成所（講習所）のある一日の記録、養成所（講習所）に参加しての感想、青年団論、川柳、俳句などを執筆した。ちなみに第１回においては、「浴恩館時報」という名のもとに３号まで発行されたが、その後の回を概観すると、最も講習期間が短い時には１号のみ、講習期間が長めの時に７号まで発行されたケースもある。

２－２．青年団指導者養成所から青年団講習所へ

第２回青年団指導者養成所は、1931（昭和６）年５月 15 日から 30 日間にわたって開設された。『実施概要』においては、「都市の部」として都市青年を主たる対象としていたことは記載されていないが、28 名の参加者のうち、商業、印刷、製綿など農業以外の職業に従事していた青年が多くを占めていた（農業も数名は参加している）ことをふまえれば、第２回は、実質的に都市青年を対象としていたことが分かる。ただし、都市青年といっても居住者としての都市青年ではなく、商業を中心とした職業に従事する青年を対象としていたので、東京や神奈川の都市部のみならず、朝鮮や沖縄

表１　講習所での一日

5:30	6:30	7:30	9:00～12:00	12:00	13:00～17:00	17:00～19:30	19:30～21:00	21:00	22:00
起床 掃除	体操 訓話 読書会	朝食	講義 （田澤ほか）	昼食	講義、屋外作業 工作、運動競技、 音楽会、研究会、 読書会など	入浴 体力検査 夕食	研究会 懇談会 座談会 娯楽会	互礼	消灯

『青年団指導者養成所（青年団講習所）実施概要』（第１回～第 19 回）の「日程表」をもとに筆者作成

など遠方の地域も含めた全国から万遍なく参加がみられる。[16]

参加者の職業以外にも、随所に第1回との相違点は見出せる。講義題目として、第1回の〈農村研究〉が〈都市研究〉に置き換えられ、社会事業や社会政策について教授されている点、視察見学・宿泊旅行も、セツルメントや社会施設への訪問、湘南・横須賀地域の都市青年団との交流など都市青年向けのものとなっている点、さらには各班で行う研究活動（その成果を研究会で発表）のテーマに「都市青年団組織経営ニ関スル研究」が設定されていた点などがあげられる。[17] また、講習期間も短めに設定されていたが、これは、農閑期がある農村青年が比較的まとまった時間がとりやすかったのに対して、都市青年は、そこまで長期の休みをとることが難しかったであろうこともふまえていたものと考えられる。

これ以降、第3回から第19回まで、「農村の回」が10回、「都市の回」が7回開催されたが、講義内容の若干の相違、視察見学先の違い、日数の違い（農村の回はやや長め、都市の回はやや短め）という、第1回農村、第2回都市で示されたスタイルは、基本的に踏襲されていった。

養成所の実践の根幹に関わるという意味で、第1回から変更された点で注目されるのは、担当の割当て方の変化と各班（室）あたりの人数の少数化である。担当の割当てについては、第1回においては、室長のほか、各班の中で、炊事委員、衛生委員、図書委員などを割当てていたのに対して、第2回は、「所内ノ事務ヲ炊事部、管理部、購買部、体育部、研究部、庶務部ノ六部ニ分チ、各班ハ一週間交替ヲ以テ之ガ分担ニ任ズルモノトス」とあるように、各班の室員全員が同じ部となり持ち回りで担当し、最終的には各班が複数の部を経験するような形へと変更となり、より班活動が重視されるようになった。[18] また、第1回と比べた時に講習生は48名から28名へと減っているのにもかかわらず、班の数が5から6に増え、同時に各班（室）あたりの人数が8～9名から4～5名へと大きく減少し、より少人数での班活動が可能になった。この変化の背景には、ちょうど第2回の養成所にあわせて、宿泊棟「西寮」が完成したことによって、各班（各部屋）を少人数にすることが可能となったことが関係していたと考えられる。

第2回で見られる班ごとによる部の持ち回り制と、各班の少人数制は、最終の第19回まで踏襲されており、この第2回で基盤が作られたといえる。回によって講習期間の長短、講習生の増減があるため一様ではないが、5名前後からなる各班が、概ね4～7日ごとに持ち回りで複数の部を担当するという方式が継続された。設けられた部と各部の役割については、以下の表2に示すとおりである。講習生が少なめの回や、講習期間が短めの都市の部の回の時は、いくつかの部を統合して部の数を少なくしたり、大日本連合青年団職員や社会教育研究生が班のメンバーに加わるなど柔軟な対応も見られた。部の活動の様子については例をあげれば、炊事部が作成した献立てに基づいてご馳走でもできればメンバーは鼻が高いが、あまり難しい献立てを作成すると、賄のおじさんから修正の抗議が出るといったこともあったようであるし、浴恩館時報（週報）の編集にあたったメンバーは、講師の控室が空いている時にそこで編集作業をしていたようである。[19]

こうして第1回と第2回の指導者養成所を通じて、中堅青年に対して中長期の講習を行っていく上での基盤がほぼ出来上がったといえるが、その運営方法や教育方法は、基本的は田澤が郡長時代に実施した宿泊講習会のものを踏襲したものであった。1914（大正3）年の講習会実施直後に作成されたと考えられる「青年宿泊講習会記録」によれば、静岡市外の蓮永寺において、1週間という期間であったが、安倍郡の15ヵ村から選出された将来の郡町村を担う19～26歳の中堅青年合計25名が、幹部（会長や役員）と寝食を共にしながら、5つの班に分かれて、共同生活を営んだ。班（組）制度が敷かれていた点（代表である組長、各組が持ち

表2　班制度と役割

部(班)	役　　割
炊事部	炊事の献立作成、配膳及び後片づけ、食事の合図
管理部	起床から消灯までに必要な合図、清掃に関する諸計画、戸締りその他の警備、郵便物の取り扱い
購買部	飲食物以外の日用品の協同購入及び販売
体育部	朝夕体操、屋外作業、運動競技、身体検査等に関する諸計画、及びそれに必要な器具の処理
研究部	研究会に関する諸準備とあと始末、見学旅行の計画、週報発行
庶務部	諸通達、交歓研修、講師接待、外来者対応

『青年団指導者養成所（青年団講習所）実施概要』（第2回）の「実施概要」、下村湖人『塾風教育と協同生活訓練』三友社、1940、pp.85-86（『下村湖人全集6』国土社、1975に所収）をもとに筆者作成

回りで炊事や掃除を役割分担)、規則正しい生活が重視された点、昼間は講義（郡長の田澤を中心に視学、地元政治家、学校長、住職が講師を担当。田澤のつてで静岡県外からも講師を招聘。内容は、憲政にはじまって、地方改良、町村自治、産業組合、農事改良、補習教育など。）中心で夜間は諸活動（夜間講話、団員茶話会：各地の青年会の様子など意見交換、研究会：郡への寄付金の使用方法の提案等）にあてられた点、視察見学（県庁、議事堂、孤児院など）が実施された点、浴恩館時報にあたるものとして団員日記があった点などをふまえれば、養成所の原型はすでに宿泊講習会の時点で形成されており、[20] その意味では、浴恩館という専用の施設で、中長期にわたって、また大日本連合青年団職員が継続的に関わるという形で実施されていった指導者養成所は、田澤の教育理想を体現すべく、宿泊講習会をさらに本格的に行なったものであったとその関係を捉えることができる。

1932（昭和7）年2月から3月に、農村の部として開催された第3回から、青年団指導者養成所から青年団講習所へと改称されているが、その背景には、受講者に上意下達的な指導者意識を植付けてはならないという田澤の青年団指導についての細心の留意があったとされる。[21]

名称は変わったものの、運営や教育に関しては、概観する限り変更はほとんどみられない。小さな変更点としては四点確認できる。一点目は、募集定員をそれまでの50名から48名へと若干減らしたことである。二点目は、「農村青年団に関係ある者の中から選抜」とあるように、それまでは記載されていなかった対象を、明確に示していることである。三点目は、班制度として前回の6つの部に加えて、それまで研究部が担ってきた一部機能も含めて、新聞、雑誌、図書の整理、管理、及び新聞発行を役割とする図書部が新たに設けられたことである。第3回は、40名の参加者が7班に分かれて、図書部も含めた7つの部を、全て担当するよう構成されており、「浴恩館時報」も第7号まで発行された。そして四点目は、体育部が中心となって準備して、この回から講習生及び大日本連合青年団関係者が参加する運動会（班対抗戦など）が、講習期間後半の午後に浴恩館グラウンドで実施されたことである。

その後は、第4回は、都市の部として、1932（昭和7）年5月から6月に、第5回は、農村の部として、1933(昭和8）年2月から3月に開催されたように、下村が専任所長として関わる第6回以前においては、農村の部は2月から3月に6～7週間程度、都市の部は5月から6月に4週間程度という形で、規則的に交互に開催されていったことが分かる。また後述するように、第4回の「講習員名簿」に社会教育研究生4名が記載されているのが確認できるように、研究生の制度が昭和7年度から始まった。

なお、第5回の『青年団講習所実施概要』においては、他の回に比べて、夜の研究会について詳しい記録が残っているので、ここで言及しておきたい。研究会の議案としては、「青年団の組織及経営」があげられ、各班は、それぞれの地域・団体の活動などをもとに情報交換しながら、団員の年齢範囲、青年団の部制、青年団と町村当局との連絡等、青年団のあり方を研究した上で発表した。また、各班は、郡中堅青年（18～25歳）向けの講習会案（4日間）の計画書も作成したが、短期間とはいえ、規則正しい生活、講義以外の共同学習（読書会や研究会）、班活動（部制）、実地視察見学なども盛り込んだ案が多く、講習所の活動に受講生が感化されていたことがうかがえる。[22]

3．青年団講習所の展開と終焉

3－1．下村の所長就任と青年団講習所の展開

下村湖人が専任所長に就任する以前は、多忙であった田澤が、可能な限り青年たちと寝食をともにして指導にあたっていたが、それをサポートする形で、大日本連合青年団主事が指導主任を務めた。第1回から第5回の『実施概要』によれば、第1回は熊谷辰治郎が、第2回は松原一彦、小笠原幹男、鈴木万一の三人が、第4回は後藤隆之助が、第5回は秋山照禅が務めていたことが分かる。[23] なお、第3回は不明であるが、社会教育研究生も務め下村とも師弟関係にあった永杉喜輔の後の「指導主任としては、開設期間ごとに、熊谷辰治郎、後藤隆之助、松原一彦、秋山照禅、奥村全応などが、かわるがわる当った」[24] という記述とつき合わせると、奥村全応が第3回の指導主任を務めたと考えられる。

台湾から帰国後に大日本連合青年団嘱託となっていた下村は、第5回には指導主任の秋山照禅とともに一般指導にあたっていたことが確認できる。そして、1933（昭和8）年4月に新たに設けられた専任所長に就任した下村は、1933（昭和8）年5月から6月に開催された第6回以降、大日本連合青年団書記の五百蔵辛碌（いおろいしんろく）と二人三脚で講習所を主導していった。このことは、1933（昭和8）年度からさらに本格的に展開していくにあたって、それまで田澤自身も可能な限り関与していた講習所の運営を下村に

ほぼ全面的に委ねたことを意味しており、田澤が旧くから親交のあった下村のことを相当に信頼していたことが分かる。なお、五百蔵は第1回から関わっていることが確認できるが、第19回まで下村の助手を務めた後に、満州にわたり官製の社会教化組織であった協和会で活動したとされるが、それ以外の経歴は不明である。[25]

下村の所長就任後の大きな変化としては、「第六回生募集要綱」に、「本年度より更に進んで本講習所を常設的施設となし、専任職員を置きて陣容を整へ、毎年四回（都市青年二回、農村青年二回）の長期講習を行ふの予定を立て」[26] と記述されているように、それまで1年に2回（2月から3月に農村青年向け1回、5月から6月に都市青年向け1回）であった開催頻度を増やして常設的施設を目指した点があげられる。実際に1933（昭和8）年度と1934（昭和9）年度は、各4回(5月から6月と9月から10月に都市の回を計2回、1月から4月に農村の回を計2回）開催され、1935（昭和10）年度と1936（昭和11）年度は、各3回（9月から10月に都市の回を1回、1月から4月の間で農村の回を2回）開催されている。

開催頻度は増えたものの、各回の実施期間は、第5回までに比べるとやや短くなり、農村の回で5～6週間程度に、都市の回では、短い時で2週間、長い時で3～4週間程度となった。中長期の宿泊講習会を行うという当初の理念からすれば2週間というのは短いが、回数を増やしてより多くの青年を講習所に集めたいという意図もあったと思われる。

講習生の募集に際しては、雑誌『青年』でも周知するとともに、「募集要綱」を各府県（台湾・朝鮮も含む）の加盟団、各府県の知事、学務部長、社会教育主事、市長等に配布したが、回が重なると修了生にも配布して、身近にいるいい青年の推薦を期待した。例えば1933(昭和8）年9月から10月にかけて都市の部として開催された第7回では、都市の回として開催された第2回、第4回、第6回の修了生にも郵送している。[27] それでも定員の48名を満たす回はなく、1936（昭和11）年1月から2月に農村の部として開催された第15回から定員を35名へと絞っている。その第15回には41名の参加がありはじめての定員超となり、続く1936（昭和11）年2月から3月に農村の部として開催された第16回においても、定員超の43名が参加している。そして1937（昭和12）年1月から2月に農村の部として開催された第18回では、受講希望者が殺到したため、20名の不採用者の存在が確認できる。採用・不採用については、地域性（各府県からの参加者数のバランス）や応募書類（作文）などをもとにしていたと考えられるが、20名の不採用者のうち6名は第19回に採用されているのが確認できる。[28]

第19回までの受講者名簿を概観すると、入所資格にそくして20歳以上30歳未満の青年が大半をしめているが、20歳に満たない者、30歳を超えている者も若干存在しており、最年少は17歳の農業青年、最年長は37歳の普通学校長であったことが確認できる。また、各府県から万遍なく参加を求めていたが、実際には偏りもあった。全19回で、毎回平均1名以上となる合計19名以上の参加があったのは、岩手、山形、東京、石川、京都、大分の6府県だが、栃木、山梨、長野、大阪、島根、岡山、徳島、高知、宮崎、鹿児島のように5名以下の府県もあり、[29] こうした差異は、各府県の連合青年団の姿勢や東京からの距離なども関係していたと考えられる。

視察見学先は、比較的遠方に出向く農村の回の時には、愛知や静岡の農村地域が対象となることが多かったが、講習所修了生の出身地が選ばれることもあったようである。『浴恩会報』（第3号）には、その様子について「『来る二月九日に第十二回生が君の村へ行くからよろしくたのむ』との五百蔵先生からの便りを頂いてびっくりしました。どうした訳で自分の村を選んだのか分らないけれ共、兎に角光栄の至りと早速お受けして……9日、一行四十名それに第八回の杉山君、第十回の遠藤君……も混って……自動車七台で牧の原の大茶園、国立茶業試験場等を案内し一路宿舎初倉小学校へ、夕食もそこそこに七時から作法室で愈々懇談会です。」[30] と描かれているように、近隣に住む修了生仲間と協力しながら、講習生を迎え入れていたことが分かる。

参加する青年たちは、大半が労働者の身であり、中長期の講習所に入所するのは容易ではなかったが、そうした状況下でも、講習所に憧れをいだき集まってきた。その熱望ぶりは、「青年新聞で我国青年団教育の最高機関所謂青年団講習所が浴恩館に毎年開かれて居ることを知って以来、どんなにか今日の生活を憧れたことであらう。幸ひにして連合団長殿から推薦せられ、今日全国より同じ希望に燃ゆる同志諸君と共に修養する機会を得たことは真実に嬉しく思ふ。……家業の忙しい中にも拘らず、心良く状況を許して呉れた父母の恩を今更乍ら有難く思ひ出すのであった。」[31] という講習期間中の時報（週報）に書かれた記述からも窺い知ることができる。

3－2．青年団講習所の終焉

昭和戦前期において、学校教育の画一的、知識偏重主義的な側面に批判が高まり、農の本義を身につけ、農村の繁栄を促すような人間形成の教育として塾風教育が各地で広がりを見せたが、[32] 講習所の実践もそうした潮流の中で捉えることができる。しかし、塾風教育の多くで、塾の中心人物の命令や強制によってなされる上意下達式で、塾生の生活と遊離した鍛練が行われている状況が見られた。それに対して、講習所では、塾長と塾生との人間的なつながりのもとで、塾生同士が友愛感情によって結びつきつつ、班活動を基盤として塾生同士が知恵を絞りながら協力し合うという協同生活訓練を行いながら、日常生活を深化させて、地域における協同社会建設の基礎となる一つの小社会を創り上げていくような、実生活にそくした自律性と創造性を基調とした鍛錬が重視された。[33]

1910年代頃から、軍部の要請もあって青年団を軍事予備訓練の機関としようとする圧力と、それに対する田澤ら青年団関係者らによる抵抗という構図が見られたが、戦時体制が進行していく中で、講習所の取組みは、自由主義的な教育として、軍人による偵察及び監視も強化されていった。[34] その様子については、後の下村や永杉の著作で描かれているように、青年団講習所の修了式に来賓として参加した軍人が、サーベルをがちゃつかせながら軍国主義を説いたり、[35] 他の塾（軍部的色彩が強い）との交歓会において、相手の塾生が、塾長の力強い訓戒による上意下達的な雰囲気のもと、強圧的な演説を行うなどというものであった。[36]

講習所を取り巻く環境が厳しくなってきたことは、『実施概要』や『浴恩会報』における下村の記述からも読み取ることができる。最終回となる第19回においても、講習所の閉鎖については特に言及されていないものの、1936（昭和11）年9月から10月に開催された第17回において、「浴恩館週報」の中で見られる「私は決して、形の上の変化や、新しさを諸君に求めるのではない。異常な生活形式は、時としては邪道である……私が諸君に求めるところは、形式に安住しない事である。形式の意味を、日に日に深く掘り下げることである。」[37] という下村の言葉には、教育実践の場で、現実と遊離した異常な生活形式を重視する風潮が高まってきていることへの危機感が示されている。

また、1936（昭和11）年5月に発行された『浴恩会報』第4号において、下村は、田澤の大日本連合青年団理事長の辞任について言及している。「去る四月廿八日、田澤義鋪先生が突如理事長の任を退かれた事は、満天下の青年を驚かせもし、失望もさせたのでありますが、浴恩会員たる諸君の感慨はとりわけ深かった事と思ひます。……田澤先生は、いつも吾々に、青年団には偶像を作ってはならない、と云はれて居りました。……それは、青年団経営者の寸時も忘れてならない根本原理にも触れているのであります。……青年団のやうな普遍的な団体、しかも、郷土と共に、国家と共に永遠なるべき団体に於ては、……自己の主観を押しつけたり、宗派運動になったり、事業団体になったりする事は厳に慎まねばなりません。……眞の統制は上からの力だけでは駄目です。個々人の自覚、小地域の理想的な友愛生活、さう云ったものを基礎として、下から、自主的に、創造的に徐々に築き上げられてこそ、眞に統制ある団体が出来上るのである。……流行心理に支配され、山師的な場当りの仕事で、この重大な時局を誤魔化して行くやうな態度は少くとも青年団に於ては絶対に避けたいものだと思ひます。」[38] という言葉には、田澤の理事長の退任の背景には、田澤自身が青年団指導者として偶像化されていくことへの危惧を抱いていたのと同時に、同年2月に起きた陸軍部隊の蹶起（2・26事件）と内閣総辞職という時局の中で、青年団に対しても上からの統制を求める圧力が高まり、友愛生活を基調とした自律的で創造的な講習所のような実践を継続していくことが困難になりつつあったことが示唆されている。

講習所の開設者である田澤という後ろ盾がなくなって約1年後の、1937（昭和12）年3月から4月に開催された第19回をもって講習所は閉鎖を余儀なくされ、下村も同年9月に所長を辞任している。軍部からの圧力にもさらされながら、閉鎖直前に開催された第18回の講義題目及び講師をみる限り、講習所（養成所）開始の頃とほとんど変わらず、田澤と近い自由主義的な知識人が多く関わっており、軍部関係者等は一切見られない点をふまえれば、[39] 最後まで、その教育理念は貫かれていたといえるだろう。

その後、田澤と下村は、講習所の精神を継承しながら、理想郷土建設のために、講習所出身者とも連携しながら、青年団OBが中心となって、地域社会建設の役割を進んで担うべく全国各地に結成されていた壮年団の指導育成に従事していった。下村は、戦時体制の進行とともに、「縁の下の力持ち」的な役割に対する不満を訴え、国家権力とより直接に結びつこうとする勢力もあらわれ、翼賛壮年団化が進行しつつあった状況を危惧して、あくまで平凡な一市民として、謙虚に自分をみがき、世界の平和と人間の幸福を願い、地域や職域で

人目に立たぬように手をつなぐ仲間をつくっていこうと、全国各地にすでに結成されていた壮年団に対して、「煙仲間」と呼称し、その理念の普及を目指して煙仲間運動を展開したのであった。[40]

煙仲間運動を展開していく上で、その理念を共有できる各地の講習所修了者の存在は大きかったと考えられる。第2回の養成所を契機に同窓組織としての浴恩会が設置され、以後、会誌『浴恩会報』を通じての交流、各地での浴恩会支部の結成による修了者同士の連帯が図られていった。第2号（昭和9年8月発行）では、それまでの修了生及び研究生の約40%、第3号（昭和10年5月発行）では約42%、第4号（昭和11年5月発行）では約30%と多くの青年たちが投稿している。

1935（昭和10）年5月の神戸での大日本連合青年団の全国大会にあわせて、地元の会員が世話人となって同窓会の企画がなされたが、さらに翌1936（昭和11）年秋の東京での第12回大会時にも、懐かしい浴恩館を宿泊場所としても企画されたのが確認できる。[41] また、五百蔵は、「校正半ばにして、東北、北海道の会員訪問の旅に出たので、また発行が予定より延びてしまった。……各県の浴恩会も一通り基礎が出来た様だ。まだの処は出来るだけ早く集って、御互ひの連絡を密にして欲しい。」[42] という記述からもうかがえるように、時間の許す限り、各地での浴恩会結成の支援のために修了生を訪問する旅を行っていたことが分かる。結成後には定期的に会員同士が集まる機会を設ける地域も生まれ、下村の地方講演に合わせて、各地で下村を囲む会も随時行われたようである。

田澤の退任によって講習所の存続も困難になりつつあった1936(昭和11)年5月に発行された第4号では、下村が、修了生に向けて、「講習所もすでに回を重ぬること十六回、同志の数が五百を算するやうになりました。……しかし……五百といふ数は、講習所の使命達成の上から見て、まだまだ貧弱すぎる数です。……すぐれた質の持主は、自分の周囲に必ずや多くの同志を作る事が出来るでせう。かりに一人の同志が、各十人の同志を作るとしますと、五百人が一躍五千人になります。で、諸君自らこの事に努力せられると共に今後の入所希望者についてもそれだけの力ある人物を推挙せられん事を希望します。そのためには、各府県で浴恩会を結成し、相互に十分な連絡をとり、単に自己所属の団からだけでなく広く県下に人材を物色して、一定の計画の下に候補者を選定していただきたい」[43] と、講習所の理念を共有できる質の高い人材を講習生として送り込んでくれるよう懇願しているが、それは、講習所の閉鎖をみすえて、その後の展開へといかにつなげていくかという切実な思いであったとも読み取れる。

4．社会教育研究生について

地方社会教育と青年団運動普及のための人材養成を目的として行なわれた社会教育研究生の養成事業は、官私大学の卒業生の中から厳密な選考を経て選ばれた研究生が、1年間の実務と必要な課目の講習を受けてから、各府県の社会教育行政の職員として赴任するというもので、昭和7年度から12年度の6年間で、毎年4名程度、合計23名の研究生が選抜された。[44]「大学は出たけれども」という言葉が流行となったように、昭和初期はひどい就職難の時期でもあり、夥しい志願者の中から研究生は厳選されたが、その手当は各県から出ており、日本における初めての計画的な社会教育指導者養成であったとされる。[45]

研究生養成事業（昭和7年度～12年度）と青年団講習所（昭和6年2月～昭和12年4月）は、その実施時期がほぼ重なっているように、密接に結びついていた。各回の『実施概要』を概観すると、講習生が少ない回においては班員の一人となり活動し、時報（班報）にも執筆するなど、研究生が、講習所において下村を補佐するとともに、講習生たちの生活の中に入る形で彼らと共に学んでいた姿が浮かび上がってくる。講習生にとっても大卒のエリート青年との出会いは刺激に満ちたもので、それは、「僕達は田澤先生はじめ諸先生の講義には数々感激したが、同時に班に於ては、僕達の範とするに足る大河平さん（※研究生）と共に此の三週間を暮し得た事は何と云ふ幸福なことだっただらうと思ふ。」[46] という記述にも端的にあらわれている。

どのような人物が研究生を務めたのかについては、永杉喜輔、戦後改革期に文部官僚を務めた高橋真照ら一部を除き知られてこなかったが、[47]『実施概要』や『浴恩会報』に基づけば、以下の表3のように各年度の研究生名簿と修了後の足跡をまとめることができる。なお、最終年度（昭和12年度）に関しては、講習所の閉鎖もあり、現時点では情報が見当たらないので、以下に示しているのは、昭和7年度の第Ⅰ期生から昭和11年度の第Ⅴ期生までの情報で、所属は1936（昭和11）年5月時点（『浴恩会報』第4号の発行）のものである。

表3　研究生名簿と修了後の足跡

	氏名	足跡
Ⅰ期生	斉藤 武博	神奈川県社会教育課
	石川 四十一	千葉県社会教育課
	久保田 武夫	広島県学務課
	飯田 忠	東京府青年指導員→長野県社会教育課
Ⅱ期生	大河平 聖雄	大連合日本青年団調査室→福島県西白河郡修練道場
	小瀬 淳	岡山県社会教育課
	久保 貞次郎	東京市
	内田 美雄	長崎県社会教育課
Ⅲ期生	今泉 勇	福井県社会教育課
	永杉 喜輔	滋賀県社会教育課
	高橋 真照	秋田県社会教育課
	村田 實	鹿児島県学務課
Ⅳ期生	中島 利理	山口県社会教育課
	吉田 嗣延	兵庫県明石市社会教育課
	伊藤 開	東京府学務課
	吉村 六郎	1年志願在営中
Ⅴ期生	柴内 春雄	社会教育研究生
	足立 節	社会教育研究生
	鍵本 博	社会教育研究生

『実施概要』の「講習生名簿」（第4回、第6回、第10回、第14回、第17回）、『浴恩会報』（第2号～第4号）の名簿をもとに筆者作成

講習所修了者の連帯として各地で浴恩会が結成されていったが、その際に、元研究生も参加していたことも確認できる。広島県では、1934（昭和9）年11月の県連合青年団主催の青年大会の開催を期に、広島浴恩会発会式と第1回集会が開催され、9名の在県会員のうち6名が参加したが、講習所の修了回数が違うため、初顔合わせも多く、広島に赴任していたⅠ期生の久保田武夫が事務局を務めた。[48] また、滋賀県では1936（昭和11）年1月に滋賀県浴恩会が結成されたが、結成式には滋賀県に赴任していたⅢ期生の永杉喜輔も参加していたことが確認できる。[49]

下村は、1年間行動を共にすることが多かった研究生への思い入れは強く、それは、主人公の本田次郎の青年期を描いた『次郎物語 第五部』（1954年）において、「友愛塾」の講習生として、若くして病死したⅡ期生の大河平聖雄（おこびらとしお）を、大河無門という名前で登場させている点にも端的にあらわれている。また、第五部が完成してすぐに下村は亡くなっているため、『次郎物語』はそこで終わっているが、沖縄出身で、戦後の沖縄問題に生涯を賭けたⅣ期生の吉田嗣延（よしだしえん）を登場させながら、下村は、沖縄を舞台にした続編を執筆しようとしていたとされる。[50]

5．今後の課題

本論文では、一次資料をもとに、青年団講習所の実像にせまってきたが、今後の課題としては、講習所での生活と教育についてのさらに掘り下げた分析と、講習所終焉後の戦時下・戦後への継承についての分析という二つのアプローチが重要となってくるだろう。

前者については、次の三点から掘り下げた分析が必要といえる。第1が、講習所で開講された講義内容について、一部存在する講義レジュメ、各回の時報（班報）の講習生たちの感想や記録（判読不明なものも多いが）、頻繁に講義を開講していた講師への着目などを通じて、明らかにしていくことである。第2が、各回の時報（班報）に記録されている講習生たちの感想や記録をもとに、講習所生活の様子についてよりリアルに把握していくことである。[51] そして第3が、社会教育研究生の養成事業に関して、さらなる手がかりを見つけることである。

一方で後者については、次の二点からの分析が必要といえる。第1が、講習所の理念が、田澤や下村が戦時下に重視した地域の壮年を対象とした煙仲間運動にいかに継承されていったのかについての掘り下げた考察である。そして第2が、戦後に、下村が、弟子の永杉らとともに展開しようとした地域に根ざした教育実践へといかに継承されていったのかという点からの考察である。

※本論文を執筆するにあたって、青年団講習所関係の貴重な資料の所在を教えていただき、閲覧させていただいた日本青年館の掛谷昇治氏には心より御礼申し上げます。

（注）

1）君島和彦「浴恩館と青年団講習所」『小金井市誌編纂資料 第三十編』1992。pp.1-10。君島は、浴恩館の設立から青年団指導者養成所（青年団講習所）の開設と閉鎖という一連の流れ、講習生の同窓会組織である浴恩会についてまとめるとともに、浴恩会から発行された『浴恩会報』をもとに、全19回の開催日時と修了者数、第13回までの県別修了者数を表にまとめている。

2）小川利夫「歴史的イメージとしての公民館―いわゆる寺中構想について―」『現代公民館論』（日本の社会教育第9集）東洋館、1965、p.21。

3）永杉喜輔「下村湖人の教育論」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第20巻、1970。萩原建次郎「近代日本思想における主体形成の論理―田澤義鋪を手がかりに―」『駒沢大学教育学研究論集』第19号、2003。上原直人「社会教育思想として

の公民教育論の検討―田澤義鋪を中心に―」『日本社会教育学会紀要』第46号、2010など。

4) 田澤義鋪「浴恩館における指導者養成の使命と日課」『青年』昭和6年3月号、日本青年館（『田澤義鋪選集』田澤義鋪記念会、1967年に所収、pp.547-548)。

5)『大いなる道―下村湖人生誕百二十年記念―』（佐賀県立図書館所蔵）下村湖人生家保存会、2004、p.40。

6) 村山輝吉「下村湖人」全日本社会教育連合会編『社会教育論者の群像』1983、p.132。

7) 上原直人「下村湖人の教育思想と地域青年教育の実践―戦前期を中心に―」『生涯学習・キャリア教育研究』第8号、2012。上原直人「戦時下における田澤義鋪の教育思想と実践―戦時体制への参加と抵抗―」『生涯学習・キャリア教育研究』第11号、2015。

8) 永杉喜輔「田澤義鋪」、前掲、『社会教育論者の群像』、p.143。

9)「青年宿泊講習会記録（修養団記念帳）―静岡県安倍郡連合青年館主催―」（前掲、『田澤義鋪選集』に所収、p.552)。執筆者及び作成年月日不明とされるが、参加者名簿、開団式から日程、講義科目、視察、茶話会、研究会、閉団式に至るまでの流れや、参加青年による日記などが詳細に記録してあり、1914（大正3）年の講習会実施直後に、田澤ないしは田澤に近い人物によって作成されたと考えられる。

10)『第1回青年団指導者養成所実施概要』中の「養成所要綱」より。

11) 同上。

12)『第1回青年団指導者養成所実施概要』中の「所生名簿」より。

13)『第1回青年団指導者養成所実施概要』中の「所生心得」より。

14)『第1回青年団指導者養成所実施概要』中の「日程表」、「所生心得」、「課目並講師」より。

15)『第1回青年団指導者養成所実施概要』中の「講師並ニ課目」より。

16)『第2回青年団指導者養成所実施概要』中の「班別所生及職員名簿」より。

17)『第2回青年団指導者養成所実施概要』中の「講師並ニ課目」及び「視察見学個所」より。

18)『第2回青年団指導者養成所実施概要』中の「実施概要」より。

19) 田澤、前掲、「浴恩館における指導者養成の使命と日課」、p.548。

20) 前掲、「青年宿泊講習会記録（修養団記念帳）―静岡県安倍郡連合青年館主催―」、pp.552-572。

21) 下村湖人『この人を見よ』田澤義鋪顕彰会、1992年、p.151。初出は1955年に池田書店から。

22)『第5回青年団講習所実施概要』中の「研究会議案」、「郡中堅青年講習会計画書」より。

23)『青年団指導者養成所（青年団講習所）実施概要』第1回から第5回の「実施要綱」、「班別所生及職員名簿」より。

24)『永杉喜輔著作集4 下村湖人伝』国土社、1974、p.163。初出は1970年に柏樹社から。

25) 小金井市文化財センター内南寮展示資料から。

26)『第6回青年団講習所実施概要』中の「第六回生募集要綱」より。

27)『第7回青年団講習所実施概要』中の「第七回生募集要項」より。

28)『第18回青年団講習所実施概要』中の「採用者と不採用者リスト」、『第19回青年団講習所実施概要』中の「19回生名簿」より。それまでの回においても、入所不許可となった者がいた可能性を否定できないが、現時点では第18回以外には確認できていない。

29) 前掲、『大いなる道―下村湖人生誕百二十年記念―』（佐賀県立図書館所蔵）、p.36。

30) 川村七太郎（第5回生、静岡）「第十二回生を村にお迎えへして」『浴恩会報』第3号、昭和10年5月、p.39。

31)『第19回青年団講習所実施概要』中の「浴恩館報」第1号、昭和12年3月3日発行。北海道から参加の青年の記述。

32)『農村に於ける塾風教育』協調会、1934、pp.1-2。

33) 下村湖人『塾風教育と協同生活訓練』三友社、1940。（『下村湖人全集6』国土社、1975に所収）

34)『田澤義鋪』田澤義鋪記念会（下村湖人執筆）、1954、pp.167-168。

35) 永杉喜輔「下村湖人の人と作品」安積得也・永杉喜輔『下村湖人の人間像―その人と作品―』新風土会、1961、p.65。

36)『下村湖人全集3』国土社、1975、pp.271-290。初出は『次郎物語第五部』小山書店、1954。

37)『第17回青年団講習所実施概要』中の「浴恩館週報」第2号の巻頭言、昭和11年10月8日発行より。

38) 下村虎六郎「榛の杜から」『浴恩会報』第4号、昭

和 11 年 5 月、pp.7-10。なお、下村虎六郎は下村湖人の本名である。

39)『第 18 回青年団講習所実施概要』中の「募集要綱」より。

40)下村湖人『煙仲間―郷土社会の人材網―』偕成社、1943、p.233。(前掲、『下村湖人全集 6』に所収)

41)「急告:浴恩会の集いをやらう!」『浴恩会報』第 3 号、昭和 10 年 5 月。「浴恩会大会予告〜久し振りの杜の古巣で〜」『浴恩会報』第 4 号、昭和 11 年 5 月。

42)五百蔵辛碌「編集後記」『浴恩会報』第 4 号、昭和 11 年 5 月、p.72。

43)下村虎六郎、前掲、「楙の杜から」、p.7。

44)『大日本青年団史』大日本青年団、1942 年、p.402。

45)野口周一『生きる力をはぐくむ―永杉喜輔の教育哲学―』開文社出版、2003、p.30。

46)『第 6 回青年団講習所実施概要』中の「浴恩 第 6 回生時報」、p.39。

47)研究生を務めた永杉は、後に、同期の三期生たちの性格やその後についてある程度詳しく言及している。永杉喜輔『社会教育夜話』(永杉喜輔著作集 8)国土社、1974、pp.42-45。

48)『浴恩会報』第 3 号、昭和 10 年 5 月、pp.8-9。

49)『浴恩会報』第 4 号、昭和 11 年 5 月、p.76。

50)野口、前掲、pp.179-185。

51)約 20 年前に、存命の講習所修了者へのヒアリングを行った三瓶千香子による貴重な研究も存在する。三瓶千香子「浴恩館において下村湖人が育てた人―岩手県盛岡市の古館正次郎氏を訪ねて―」『生涯学習フォーラム』紀尾井生涯学習研究所、3 巻 1 号、1999。

The Actual State of *Seinendan Kousyuujo:* Focusing on its Establishment and Development Process

Naoto Uehara (Associate Professor, Nagoya Institute of Technology, Japan)

Abstract

The aim of this paper is to reveal the actual conditions of *Seinendan Kousyuujo* (hereinafter, referred to as *Kousyuujo*),which was held a total of 19 times between 1931 and 1937 at *Yokuonkan*, a branch of *Nippon Seinenkan*, for the purpose of training leaders of young men between 20 and 30.

Previous studies have offered an overview of the *Kousyuujo* and its general development process. This paper, however, will focus on records related to *Kousyuujo* that were held in *Nippon Seinenkan*, which had not been properly verified prior to this study. Through its meticulous analysis, this study was able to reveal the two following observations.

The first observation concerns a certain degree of change noted in the management or structure of each session. In the year following Shimomura Kojin's appointment as Director, the number of sessions per year increased, with the collaboration of graduate students also increasing with each session. The second observation concerns the roles that research students played at *Kousyuujo*, and their paths after finishing the training sessions. It was revealed that social education research students' projects were conducted in conjunction with the establishment of *Kousyuujo*, as part of leadership training for local community education.

The following two approaches will be crucial for future research. Firstly, further and more in-depth analysis into the lives and education of students at *Kousyuujo* is required. Second, an analysis of the progression of *Kousyuujo* during and after the war, after the sessions had ended, is needed.